

1. 情報処理過程としての災害対応

災害は環境の急激な変化によって、その地域に暮らす人々のそれまでの生活様式の維持が困難になる事態であると定義できる。環境変化はそれに直面する人間に対して、再適応をもとめる。それまでの適応戦略では適応しきれない事態や、それまでに直面したことがない新しい課題が生まれるからである。この点では個々の被災者も、災害対応に携わる者も同じである。したがって災害に直面した個人にとって、災害とは新しい環境への適応課題としてとらえることが可能である。個人がすでに十分な理解を持ち容易に解決可能な課題では、何をすべきかはほぼ分かっており、自分が置かれた状況で、その妥当性を確認するだけで十分である。しかし、よく分からない課題が発生した場合には、どのような状況が起こっていて、それに適応するにはどのような行動がありうるのか、それはどのような結果を生むのかなど、多くの情報が意思決定のために必要になる。以上のように、災害対応の過程を新しく生まれた現実について認識し、それへの再適応をはかる過程であると考え、災害対応は適応のための情報処理過程であると考えられる。

2. 災害対応における情報システムの役割

災害情報の観点からは、災害情報システムとして少なくとも以下の3つの機能が必要である。

- 1) 被害想定による、正確な被害イメージの提供
- 2) 被害抑止限界の設定による、ハード面での整備の達成目標の明示
- 3) 災害状況の的確な把握と共有化による、効果的で柔軟な災害対応の支援

さらに、こうした機能を持つ災害情報システムの構築にあたっては、

- 1) 被害抑止策と被害軽減策の両方を統合的に検討できること
- 2) 事前対策と事後対策の両方の時間的局面において共通に利用できること
- 3) 関連する組織・部局間での調整や相互応援を容易にすること。

に留意する必要がある。災害情報システムの構築にあたって、コンピューターの利用はシステムを強力にする。しかし、コンピューターシステムの導入が即災害情報システムとはなり得ないことも忘れてはいけない。災害情報システムに求められる機能に応じて必要となる情報内容の確定や、その共有化の手続きの確定がなされることこそが、システム構築において最も肝心の課題となる。

3. 防災CALSの確立を目指して

上記のような情報システムが満たすべき要件は個別に存在しているのではなく、相互に関連しており、それを満たすものを本稿では防災CALSと名付ける。

CALSとは1985年米国国防総省で始められたデジタル革命をさす略語である。略語は変わらないまま原語は以下のように変化してきた。

"Computer Aided Logistics Support"(1985)／"Computer-aided Acquisition & Logistics Support"(1988)

"Continuous Acquisition & Lifecycle Support"(1993)／"Commerce At Light Speed"(1993)

当初の"Computer Aided Logistics Support"時代のCALSの目的は、兵器の高度化に伴って紙ベースでは機能しえなくなった米軍のロジスティクス標準をデジタル化することであった。1998年には兵器調達の効率化を図るために民間企業と米軍との間の商取引をデジタル化することが加わり、CALSは"Computer-aided Acquisition & Logistics Support"の略になった。1993年からはCALS技術の非軍事分野へ

